

ステロイド混入被害拡大

背景に皮膚科医不信

患者、説明や診察「不十分」

横浜市都筑区の山口医院が「ステロイドが入っていない」と虚偽の広告で漢方クリームを処方していた問題。昨年だけで1600人が受診した背景には、アトピー患者の根強い「ステロイド不信」があった。治療の柱としてステロイドが位置づけられながら、「使いたくない」という患者が依然として多いのはなぜなのか。医師や患者の声から探った。

山口医院の被害者の一人、森立弁護士(38)は東京都江戸川区。IIは全身の炎症で救急搬送の経験もあるほどアトピーに悩みステロイドに頼ってきた。しかし副作用を心配して「脱ステロイド治療」を決意。6年前、山口医院の漢方クリームにたどり着いた。

ステロイド外用薬は炎症を抑える効果が強い反面、使用方法や継続使用によって皮膚が萎縮して薄くなるなどの副作用がある。

森さんも「ステロイドな

山口医院の被害者の一人、森立弁護士(38)は東京都江戸川区。IIは全身の炎症で救急搬送の経験もあるほどアトピーに悩みステロイドに頼ってきた。しかし副作用を心配して「脱ステロイド治療」を決意。6年前、山口医院の漢方クリームにたどり着いた。

ステロイドは1990年代、副作用への懸念が高まり、科学的根拠に乏しい特殊療法や高価な健康食品を勧める「アトピービジネス

ス」が社会問題化した。問題を受け、00年、日本皮膚科学会は「適切な治療をせず重症化する患者が増えている」として、ステロイド外用薬の使用を治療の主体とするガイドラインを定めた。

日本臨床皮膚科医会の常任理事で、県皮膚科医会副会長の浅井俊弥医師(55)は「症例研究を重ね、ステロイドの安全性は世界的にも共有されてきた。適切に使うことで、ほとんどの患者さんには効果があり、今後アトピー治療の中心的役割を果たしていくでしょう」と説明する。

一方、一部の患者には、ステロイドを使わない治療を望む声も根強い。

患者団体「atopie」は7月22日、日本皮膚科学会に「ステロイドでアトピーが治らない場合は、使わない治療も選択肢の一つであるとガイドラインに取り入れてほしい」との9千人分の署名を提出した。共同代表の会社員、伊藤愛子さん(39)は千葉県野田市。IIは「他の病気が治療が選べるのに、アトピーはステロイドを拒否するだけで医者には『来ないでくれ』と言われる。柔軟性を持たせてほしい」と訴える。流れ作業のようにステロイドを塗られる治療に不信が募り、9年前にステロ

イドの使用をやめた。メンバーの会社員、遠藤円香さん(31)は横浜市都筑区。IIは長女(6)が患者。複数の皮膚科医を受診したが、使うステロイドも治療もバラバラだった。「ガイドラインが変わることで医療現場の考え方も変わり、社会の認知も変わって欲しい」と話す。

「悪者はやっぱりステロイドなんだろう。君を診察してきた皮膚科医にも責任があると先生は思う」竹田綜合病院(福島県会津若松市)の皮膚科長、岸本和裕医師(43)は、著書「アトピー卒業ブック」(健康ジャーナル社)でステロイド不信の原因として「皮膚科医の力不足」を指摘している。

同院を受診したアトピー患者95人にとったアンケートで、同院に来る前に受診した医師への不満について尋ねると「説明が少ない」36%、「皮膚の症状をじっくりと見てくれない」31%、「信頼できない」20%、「肌を触ってくれない」19%など。同院で「初めて薬の塗り方を教えてもらった」と喜ぶ患者もいるという。

岸本医師は「患者さんは最初にかかった皮膚科で裏切られ、医師やステロイド拒否に走ってしまった」と話す。副作用のあるステロイドを大道具にたとえ、「有用だが使い方が悪い」ではなく、使いこなせない医師が多すぎる。レベルの向上が必要だ」と指摘する。

ステロイド混入問題

「ステロイドが入っていない漢方クリーム」と虚偽の広告をしていたとして、横浜市が2月、横浜市都筑

区の山口医院に行政指導をしたことで問題が発覚。県警は4月、不正競争防止法違反容疑で同医院を家宅捜索した。東京地裁は7月14日、同医院の破産手続きを

開始する決定をした。漢方クリーム購入者への返金方針は示しており、詳細は管財人のHP (<http://www8.ocn.ne.jp/~ykhassan/9423.html>)。



ステロイド混入問題の発覚を受け、山口医院が開いた説明会。会場に入りきれないほど参加者が詰めかけた。4月4日、横浜市